



警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年10月発行（第54号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ 「聖所の基はくつがえされる」 エレミヤ

◎証「神への服従を選ぶなら」 E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「聖所の基はくつがえされる」 by エレミヤ

本日は、「聖所の基はくつがえされる」として、このことを見ていきましょう。

< 聖所の基が覆されることは預言されている >

聖書は獣の国の働きの下で、終末の日に、聖所のもといが覆されることを語ります。以下のとおりです。

ダニエル 8:11 軍勢の長にまでのし上がった。それによって、常供のささげ物は取り上げられ、その聖所の基はくつがえされる。

ここに描かれている「聖所の基」が覆されるとはどのようなことがらを語っているのでしょうか？本日はこのことを見ていきたいと思うのです。

さてこのことを考えるにそもそも問題となっている聖所とはどんな所なのでしょう？考えてみましょう。聖所に関しては以下の記述があります。

1歴28:10 今、心に留めなさい。主は聖所となる宮を

建てさせるため、あなたを選ばれた。勇気を出して実行しなさい。

この箇所からわかることは、聖所とはすなわち、神の宮、神殿であるということです。ですので、ダニエル書で預言されていることは、終末の日に獣の国の台頭の下で、神の宮の基、基礎、土台が覆される、ということがらなのです。

< マタイ 24 章も同じ日を預言する >

さて、このことがら、宮の基が覆されるとは、実は以前見たマタイ 24 章の宮の崩壊に関する以下の預言と全く同じ事柄なのです。

マタイ24:1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。

24:2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

このマタイ 24 章は主ご自身が終末の日を預言した聖書箇所として、有名な箇所ですが、ここでも終末の日に起きる宮の崩壊、宮の石の崩壊に

関して述べられています。ですので、このこと、宮の崩壊が終末の日において大きな意味合いがあることがらであることがわかるのです。

<聖書は宮の石、土台が崩されることに関して、言及している>

この終末の日に起きる宮の崩壊ということを考えてみましょう。冒頭のダニエル書、さらにこのマタイ24章とも、終末の日に起きる大きな事件として宮の崩壊に関して語っています。そして、さらによく見ていく時もう一つ気付くことがあります。

それは、どちらも宮の石、土台石が崩されることに関して言及していることです。すなわち、ダニエル書では、「聖所の基はくつがえされる。」として、宮（聖所）のどの部分でもなく、特定の箇所、すなわち、宮の基、基礎、土台、土台石に関して言及しているのです。このことは、少し奇妙といえ、奇妙です。何故なら、宮は、神の民の礼拝の中心の場所であり、宮に関して特筆すべきこと、記載すべきこと、大切なことがたくさんあるからです。

神の宮の中には契約の箱やら、マナのつぼ、パンの机、燭台など大切なものがたくさんあるのですが、しかし、終末に関しての聖書の記述はこれらのどれにも、言及せず、ただ、宮の石が崩されること、土台石が崩されることに関して語るのです。このことに何か意味合いがあるように思われます。

<宮の基、土台石の意味合いは？>

宮の石、土台石の意味合いは何でしょうか？この石に関して、エペソ書はこう語ります。

エペソ 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

2:21 この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

2:22 このキリストにおいて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

ここに宮の石、土台石は、使徒や預言者であることが語られています。さらに礎石は、キリスト・イエスご自身であることが明言されています。

ですから、聖所のもといが覆される、宮が崩壊する、という時、物質的なことばかりに目をとめるべきでなく、逆にたとえの意味合いに目を留め、新約の聖所であり、宮である教会の崩壊に関して語られている、と考えるほうが妥当と思われる。

聖所、宮の崩壊を考えると、たとえの理解が必須と思われ、かつて主が弟子たちに「このたとえが理解できないのか」と叱責されたように聖書のたとえを理解することは必須であることを思い出しましょう。そして、特に黙示録を初めとした終末の記述には、たとえが多用されていますので、さらにたとえの理解は必須なのです。

このエペソ書の箇所によるなら、新約における宮とは、クリスチャンの集まりである教会をさすことがわかるのです。ですので、終末の日に宮が崩壊するという時、物質的な建物に拘泥するのは的外れであることがわかります。それは、実は神の宮である教会の崩壊をさす可能性が高いからです。

<第3神殿が建つことはあり得ない>

宮に関してよく第3神殿の再建ということがいわれます。現在は宮のかけらもない、エルサレムにいずれ、第3神殿が再建され、その再建された神殿が将来崩壊する日をキリストが預言したのだという随分気の長い考えです。このことを考えて見ましょう。現在のエルサレムには、宮は存在していません。一つの石も残っていないのです。それに加えて、宮を再建するといってもどこへでも建てればよいというわけではなく、宮が建つべき地は聖書に明記されています。それは、エルサレムのモリヤ山上です。

そして、非常に困ったことはその場所には、既にイスラム教の金のドームが建っていることです。この地は、世界何十億と存在するイスラム教徒にとって、3大聖地の一つであり、彼らにとり、非常に特別な地なのです。結果として、彼らがこの地を手放し、空き地となり、この地に新たに第3神殿が建てられる可能性など常識的にあり得ません。可能性はゼロです。すなわち、第3神殿とは、ありえない幻の計画のようなものなのです。結論として、終末預言に関連して、物質的な宮を考慮することはあまり意味のあることとは思えないのです。

逆にこのように見事に物質的な宮の再建などありえない、そのような状況を神が許したことに目をとめるべきだと思うのですがどうでしょう。私には、神がこのように1. 物質的な宮が全く崩壊していること。2. 再建も全く不可能であること。これらを通して、私たちに何か考えるように語っているように思えます。神が語られているのは、私の理解では、私たちが物質的な宮の崩壊ということを考えるより、それより、たとえの意味合いとしての宮の崩壊に関して考えることと思えるのですが、どうでしょう。

<ダニエル書8章の記述を見ていく>

さて、上記理解をもとに聖所の基が覆されることを語る、ダニエル8章の記述をもう少し見ていきましょう。

ダニエル8:10 それは大きくなって、天の軍勢に達し、星の軍勢のうちの幾つかを地に落として、これを踏みじり、

獣の国が大きくなり、力をつけ、天の軍勢に達する、星の軍勢に達することが書かれています。このことの意味合いは何でしょう？天の軍勢、星の軍勢とは以下のアブラハムに関する記述から、アブラハムの子孫であるイスラエル、また、新約のイスラエルである、クリスチャンをさすと理解できます。

創世記22:17 わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く

増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。

この箇所では、アブラハムの子孫は天の星にたとえられています。ですから、天の星とは、アブラハムの子孫であるイスラエル、新約においては、新約のイスラエル、クリスチャンをさすのです。さらにまた、イスラエルとは神の兵士という意味があります。すなわち、新約のイスラエルであるクリスチャンこそ天の軍勢なのです。

ですから、「それは大きくなって、天の軍勢に達し」との意味合いは、終末の日に獣の国が力をつけ、天の軍勢である、クリスチャン、キリスト教会にまで、手を伸ばす、影響を及ぼす、ということをかたるものなのです。

「星の軍勢のうちの幾つかを地に落として、これを踏みじり」

獣の国の影響の下で、星の軍勢、すなわち、キリスト教会のいくつかの教団が地に落とされる、この世につくものとされることが書かれています。クリスチャンは本来天的なものであり、天に属するものなのですが、この獣の国の教会への干渉、クリスチャンへの干渉により、教会、教団のいくつかは、地に落とされ、この世の影響を受けるようになります。このことは、実は獣の国であるアメリカでは、既に頻繁に行われていることです。

アメリカにおいては、それこそ、国を挙げて、正しいクリスチャンをみことばに沿って歩ませない、この世につけようとするムーブメントが盛んに行われています。

すなわち、みことばに従い、同性愛に反対するクリスチャンや反対のデモを行うクリスチャンは逮捕されたり、罰金刑を受けたりしていません。逆に同性愛に賛成するクリスチャンは大いにこの国で歓迎されています。このようにして、この獣の国は国をあげて、天的なクリスチャンを地に落とそうとしているのです。

8:11 軍勢の長にまでのし上がった。それによって、常供のささげ物は取り上げられ、その聖所の基

はくつがえされる。

軍勢の長とは謎の秘められた表現ですが、軍勢が新約のクリスチャンをさすことがわかると理解できます。軍勢の長とは、すなわち、キリスト教会のトップリーダーということなのです。教会のトップは誰かという、他でもない主なるイエス・キリストです。しかし、あろうことか、獣の国は、そのイエス・キリストの地位さえ、奪い取り、自分たちが建てた王である反キリストにとって代える、ということがここで書かれていることなのです。キリスト教会をひっくりかえす恐るべき日がここで預言されているのです。

「それによって、常供のささげ物は取り上げられ」

常供のささげ物とは何でしょうか？以下にその記述があります。

民4:16祭司アロンの子エルアザルの責任は、ともしび用の油、かおりの高い香、**常供の穀物のささげ物、そそぎの油**についてであり、幕屋全体とその中にあるすべての聖なるものと、その用具についての責任である。」

ここでは、常供の穀物のささげ物、そそぎの油について書かれています。これらが常供の供え物なのです。これらはたとえであり、穀物はパン、すなわちみことばのささげ物、すなわち、礼拝でささげられるメッセージをたどったものです。そそぎの油は礼拝で下される油、聖霊のたとえです。

そして、常供の供え物が絶たれるとは、すなわち、教会の中で、もう正しいメッセージが語られることはなく、神の霊が下されることはない、ということ語ったものです。もう教会の中でキリストこそ、唯一の救い主であるなどという正しい教えは語られなくなるのでしょうか。

「その聖所の基はくつがえされる。」

聖所は、先ほど申し上げたように、神の宮としての教会のたとえです。そしてその「基」とは、エペソ書に書いてあるように、使徒や預言

者また、キリストの教えです。それらがみな覆される、ひっくり返されることに関してここでは語られているのです。

イエス・キリストによる救いやあがない、再臨、携挙など、あらゆる教会の土台の教えがみな、ひっくり返され、崩されるようになるのでしょう。それらは、間違えた教え、科学的でない教えとして、公の教会からは追放されます。

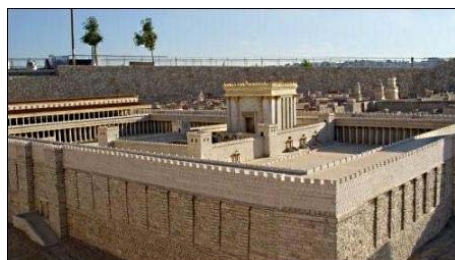
8:12 軍勢は渡され、常供のささげ物に代えてそむきの罪がささげられた。その角は真理を地に投げ捨て、ほしいままにふるまって、それを成し遂げた。

軍勢は渡され、とはキリスト教会が獣の国の支配の下に入る、ということです。従って教会の牧師の任命、また教理の制定などは、皆獣の国アメリカの支配や許可なしには行われなくなるようになります。実は、このような動きはアメリカでは既に始まっています。すでに、許可なしに勝手に家庭集会を開いたという理由でアメリカの牧師が逮捕、罰金刑を受けています。

「常供のささげ物に代えてそむきの罪がささげられた。」

常供のささげ物、すなわち神へささげられるべき正しいメッセージの代わりに、そむきの罪、すなわち、神に対して冒瀆としかいいようのないメッセージが教会で語られるようになります。同性愛も問題ない、どの宗教にも救いはある、などのメッセージが教会で語られるようになるでしょう。

「その角は真理を地に投げ捨て、ほしいままにふるまって、それを成し遂げた。」



宮の基は覆される(イメージ)

教会の中で聖書の真理は投げ捨てられるようになります。もう地獄も裁きもないように語られるのでしょうか。聖書の真理は地すなわち、この世的な常識にとって代わられます。聖書は同性愛を罪だと語るのですが、地の常識にとらわれた人々の「性同一障害」などとの、この世的な論理が優先されるようになります。

以上見てきたように、聖書は終末の日に宮、すなわち、神への礼拝所としての教会が崩壊し、その土台が崩されることを繰り返し繰り返し語ります。キリスト教会の根本教理や教えがひっくり返される日について語るのです。

<テサロニケ書も同じ日を語る>

キリスト教会の教理の土台がひっくり返される日が来る、などという、荒唐無稽な教理の様に思えるかもしれませんが、私たちの目が開かれるなら、この日は聖書のあちこちで預言されています。たとえば、テサロニケ書にも以下の様に預言されています。

2テサロニケ 2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

ここでは、背教がまず起こるとして、クリスチャンの教会が神やキリストに背を向け、その教えに背く日が来ることを明確に預言しています。それは、別のことばでいうなら、先ほどから見ている宮、神の礼拝所としての教会の土台、根本教理が崩れる日が来るとの預言の成就なのです。そして、そのクリスチャンの背教や、不信と連動するように、不法の人、すなわち、滅びの子が登場することが書かれています。この人物こそ、反キリストなのです。

そして、彼、反キリストが、「神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言」することも描かれています。宮とは、度々語っているよ

うに神の礼拝所としての教会のことです。そして、教会の神、主は一人しかおらず、それは、イエス・キリストのみのはずなのに、その日には、ぬけぬけと反キリストが、キリストを追い出し、その座を占めることが預言されているのです。

いったい、反キリストはどうやって、教会の中からキリストを追い出し、そのキリストの座を奪うのでしょうか？想像もできませんが、しかし、聖書にはっきりと彼が「自分こそ神である」と宣言すると書かれている以上、このことは実現するのでしょうか。

私の想像ではその反キリストが神として、立つその前に世界中で徹底してイエス・キリストに対する、非難や、中傷、悪い噂が繰り返られると思われれます。世界中の科学、歴史、学者、マスコミ、政治家などが口を揃えて、イエス・キリストは、とんでもない詐欺師、福音書はインチキの書であると語るようになるのでしょうか。その結果、イエスキリストの評判は地に落ち、彼を信じる人々さえ、憎まれるようになるでしょう。以下のことばはその日を預言しているように思えます。

マタイ24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

そして、キリストの評判が地に落ちたその後、反キリストが歓呼の声とともに背教の教会に迎えられるようになるのでしょうか。これらのことに目をとめ、この時代にふさわしい歩みを心がけましょう。

—以上—



福音のために逮捕されたアメリカの牧師たち

以前行っていた教会の牧師さんが、「とにかく服従ですよ！」ということを私にアドバイスくださいました。どういったことからそのような話の展開になったのかは、今ひとつ覚えていませんが、クリスチャン生活をしばらくお休みしていて、信仰の歩みや教会生活に復帰して間もなかったもので、「どんな風に歩んだら良いのでしょうか？」なんていう質問をしたのではないかと思います。

それからしばらく時を経て、同じ教会ではありませんが、ある時某兄弟が礼拝の中で証をしていました。証のさいごのほうに言われたことですが、「神さまは私たちクリスチャンのことを守ってくださいます。しかし、祝福や恵みを受けるのは、神さまに従う人です」ということをおっしゃっていました。とても印象深いことばでしたが、特に「祝福や恵みを受けるのは、神さまに従う人です」の部分が、私の耳に響きました。そしてこのことばは、今でも信仰生活の中でたびたび思い起こします。

ところで当時の私は今と違って、群衆の歩みでした。なので、上記2件の「服従」ということばは印象に残ったものの、しかし「霊の奥底」に

おいて理解していたか？と言うと、そうではありませんでした。でも、のちになって、真に主の弟子として歩みをするようになってから、お二人の証言は私にとって、霊的な建て上げの一部となりました。そして最近、福音書を読んでいく中で、「服従」ということが益々色濃くなっていきました。ちなみに福音書において、イエスさまはペテロやヨハネやヤコブに「わたしについてきなさい」ということを言われました。すると彼らは網や舟を捨ててイエスさまについていきました。そして生涯にわたって、イエスさまに従い通して、「天の御国」を相続しました。

このことに何か語りかけを感じないでしょうか？ イエスさまに服従して、天の御国を相続したことは、先のお二人の証言の「服従」にそのまま符合するのではないかと思います。そして兄弟が言われたことば、「祝福や恵みを受けるのは従う人です」とは、ペテロやヨハネやヤコブのように、イエスさまの言われることにさいごまで従って天の御国を相続するパターンのことばをまさに言われていると思います。なので、「神さまへの服従の歩み」＝「天の御国の相続」という公式が自然と成り立つのではないかと思います。

さて、そのことを理解したのなら、そのように歩んでいけばよいわけではあります。そのことで神さまから私なりに示されたことがありますので、少し話をしたいと思います。「神さまへの服従への歩み」はたしかにすばらしいものですし、はたまた世界中のすべてのクリスチャンが全うできたら、と願います。しかし、もう一面のことも話しておきたいと思います。非常に尊い歩みではあるのですが、しかし、現実はどうか？と言うと、聖書にも書かれていますように、「十字架を敵としているクリスチャンが多い」ということも理解しながらの歩みだということは、ひと言申し上げておきますね。これも聖書に書いてあることですが、要は「細くて狭い道」であって、大半の人が選ばない道なのです。それこそ、「命に至る門は小さく、その道は狭く、見出す者はまれ」と書かれている通りでありまして・・・このことは裏返して言うなら、滅びに至る大きくて広い道を多くのクリスチャンは選んでいる、ということなのです。「信じられない！」「そんなはずはない！多くのクリスチャンは狭い道を選んでいるでしょ？」と思うかもしれませんが、しかし聖書にそのように書かれていますので、それはそのまま理解したいと思います。そういった意味合いでは、「神への服従」の歩みというのは、「滅びに至る道」を歩んでいく人を横目に見ながらの歩みなので、「神への服従の道を歩んでいくぞ！」という決断にプラスして、それ相応の「自覚」と「覚悟」も必要だということは、正しく理解しておきたいと思います。しかし、そのことを承知の上で「神への服従の歩み」に徹していくなら、そしてさいごまで全う

するなら、クリスチャンの入るべき所、すなわち「天の御国」に入ります。なぜ、断言できるか？と言うと、先ほど話しましたペテロやヨハネやヤコブがそうだったからです。彼らはさいごのさいごまで、イエスさまに服従して、みごとに天の御国を相続したパターンだからです。ゆえに、今の時代においても彼らと同じ歩みをする人には、「天の御国」が約束されているのです。

反対に「神への服従の歩み」を選ばないときに、どうなるのか？「服従」とか「従順」の反対は「不従順」ということですが、そういう歩みをしていくときに、サタンに用いられる可能性があります。つまりサタンの意向やサタンの喜ぶことを実行するクリスチャンの歩みとなってしまうのです。サタンの意向とは何か？と言うと、正しいクリスチャンを迫害したり、悩ませたり、つまづかせたりということですが、不従順な人は、正しいクリスチャンの歩みを何らか妨害する器として用いられてしまうと思います。そしてその結果、ゴールする予定であった「天の御国」からみごとに外されてしまう可能性がありますので、気を付けていきたいと思います。

ちなみに神さまに服従するか？しないか？に関して、恐らく「中間」というものは無いと思います。必ずどちらかひとつだけを選択することになると思います。そしてクリスチャンの歩みは常々、「神さまに従うのかどうか？」の選択の

繰り返しなのでは?と思います。もちろん個々におけるクリスチャンの自由意志を尊重される神さまではありますが、私個人としては、「神さまへの服従の歩み」を生涯にわたって全うできたらと、心から願っています。もし、御心を感じ

ましたら、ぜひ実践してみてください。いつも大切なことを語ってくださる神さまに、栄光と誉れがありますように。

<お知らせコーナー>



エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax：020-4623-5255， メール truth216@nifty.com